

第一講 『今昔物語集』

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、丹波の国に住む者あり。田舎人なれども心に情ある者なりけり。それが妻を二人持ちて、家を並べてなむ住みける。本の妻はその国の人にてなむありける。それを(イ)ば静かに思ひ、今の妻は京より迎へたる者にてなむありける。それを(ロ)ば思ひ増したる様なりければ、本の妻心憂しと思ひてぞ過しける。

しかる間、秋、北方きたのかたに山郷やまざとにてありければ、後の山うしろの方に、いとあはれ

5

げなる音こゑにて鹿の鳴きければ、男今の妻の家に居たりける時にて、妻に、こはいかが聞きたまふかといひければ、今の妻、煎物いりものにても甘うまし。焼物にても美うまき奴うまぞかしといひければ、男、心に違ひて、京の者なれば、かやうの(ハ)ことをば興おこずらむとこそ思ひけるに、少し心づきなしと思ひて、只ただ本の妻に行きて、男、この鳴きつる鹿の音は聞きたまひつかといひければ、本の妻かくなむいひける。

10

われもしかなきてぞ君に恋ひられし今こそ声をよそにのみきけと。

男これを聞きていみじくあはれと思ひて、今の妻のいひつること思ひあはされて、今の妻の志失せにければ、京に送りてけり。さて本の妻となむすみける。

15

問五 傍線部（ホ）の意味は次のうちどれか。番号で答えよ。

- ① 今の妻の気持が以前のようにではなくなったので
- ② 今の妻を本の妻と並べて住まわせておくとまずいことになったので
- ③ 今の妻の気持が別の男へ移ってしまったので
- ④ 今の妻を恋しいと思う気持がなくなったので



第一講

『今昔物語集』(説話)

- ・平安後期(12世紀初期一〇〇〇年頃)
- ・和漢混交文
- ・天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)
の三部構成

已然+ど・ども
逆接確定(〜ケレドモ)

なさけ【情】

- ①風流心・風情
- ②思いやり



にて (格助 or 断定+接助)

- ①〜で
- ②〜として

助動詞き・けり

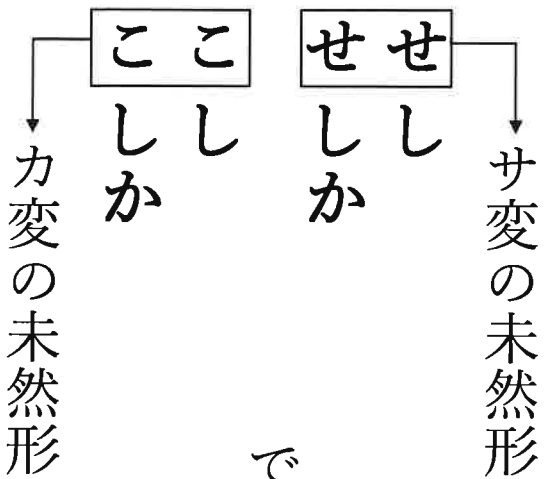
き…(体験過去) ↓ 直接自分が体験した事実を
回想する時に使われる

けり…(過去伝聞・過去詠嘆) ↓ 伝え聞く過去、
つまり他人から聞いた、間接体験の
事実を回想する時に使われる

けり	き
(けら)	せ
○	○
けり	き
ける	し
けれ	しか
○	○
過去伝聞(うたへとかいう) 過去詠嘆(うたなあ)	体験過去(うた)

※過去の助動詞「き」の活用は絶対暗記！

。「き」は連用形に接続するが、力変・サ変は未然形に接続する場合のほうが圧倒的に多い。

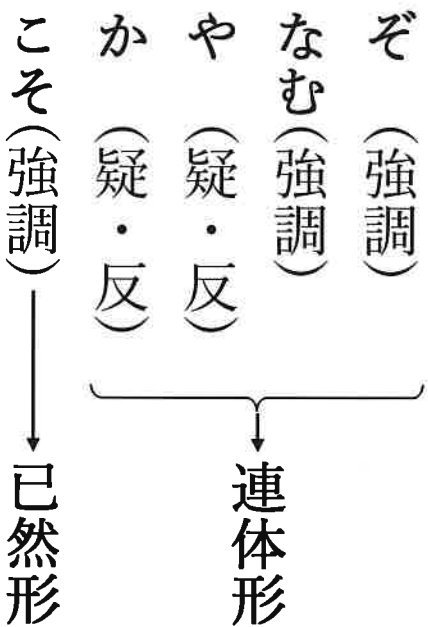


で覚えておこう！

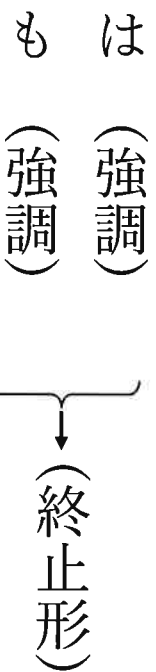
係り結びの法則

係助詞：強調(文末に力を及ぼす)

ぞ・なむ・や・か・こそ・は・も



係り結びをする係助詞は右の5つだけ



係り結びをする係助詞は、「ぞ・なむ・や・か・こそ」

。「こそ・ぞ・なむ」の強さは **こそ** > **ぞ** > **なむ**。
「なむ」が一番弱い。会話には「なむ」が使われていることが多い。

《結婚してくれてありがとう、でも俺はお前の家の経済力と結婚したんだ》

当時、男性は、女性の経済力と結婚する。当然女性は働いていないから、女性の親が裕福かどうか。だから、女の親が亡くなり、男は経済的援助をしてもらえなくなったために、他に女を作り出て行くパターンは結構多い。特に男(婿)の衣服の世話は、女(妻)の家の義務となっている。

《俺、おまえのこと好きだけど、おまえだけってわけにはいかないんだ》

平安時代、結婚を表す語には、よばふ(求婚する)、合ふ・会ふ・逢ふ(男と女が契りを結ぶ。または結婚する)、通ふ(男が女のところに通う。通うとあつたら、主語は 男。待つのは女)、住む(結婚して、一緒に生活をする)などがある。

平安時代の結婚形態は、男性貴族は同時に二人以上の妻を持つことができるいっふたさいせい一夫多妻制で、男が女のところに通う妻問婚つまどいこん(通い婚ともいう)。藤原道長のお父さん兼家には、正妻、時姫ときひめのほかに七人もの女性(妻)がいたといわれている。その女性の一人に『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母わたらのみちつなのははがいる。

女に自由はない、女は待つ身の妻問婚。といってもやっぱり女は大嫉妬はするわけよ。だって夫に七人の女性がいれば、単純計算したって一週間に一回しか自分のところに来ないわけじゃん。十人、妻がいればいつ来るかわからない。「たまに私のところに来れば十分です。私はいつでもあなたのお越しをお待ちしております。」なんて女はいないの。今と同じだよ。

已然十ば

順接確定

ノデ
トコロ
ト

あいなし

あぢきなし

うし【憂し】

うたて

うとまし【疎まし】

こころうし【心憂し】

こころづきなし

むつかし

不快である・不愉快である

(マイナスイメージ)

こころうし【心憂し】

① つらい

② いやだ

③ 情けない

「と

「など

「とて

会話 or 心中

—
げに

—
げなり

—
げなる

形動

—
かに

形動

あはれ

をかし

趣深い

① しみじみと情趣がある

② 趣深い

③ 悲しい

④ さびしい

⑤ かわいい

⑥ すばらしい

いかが——連体

疑 どのように

反 どうして

ぞかし（文末強調）

だ！ よ！ ね！

かし（念を押す終助詞）

よ！ ね！

「混ず」（下二）以外のザ行は
すべてサ変

接助「に」「を」

順接確定

ノデ
トコロ
ト

逆接確定

ノニ
ケレドモ
ノダガ

こころづきなし

- ① 気に入くわない
- ② 愛想がない
- ③ 面白味がない

さ → そう
かく → このように
しか → そのように

指示副詞

掛詞

一つの音（語）に二つ以上の言葉をひっかける技巧

しか
鹿
しか（指示副詞）

く（に）―「る・らる」↓受身

会話・和歌の中に使われた「けり」は詠嘆

いみじ

たいそう

⊕ すぐれている・すばらしい・立派である

⊖ 不吉だ・ひどい・大変である・悲しい

(程度を表し)

たいそうく・とてもく・ひどくく

(自分の)感情・心中＋「る・らる」↓自発
(自分の)動作行動＋「る・らる」↓自発

こころざし【志】

①愛情・気持

②お礼(の贈り物)

助動詞 つ・ぬ

つ・ぬ…(強意・完了)↓連用形に接続

ぬ	つ						
な	て						
に	て						
ぬ	つ						
ぬる	つる						
ぬれ	つれ						
ね	てよ						
強意・完了							

① 強意…副詞を利用して訳す。

「マサニ・キット・マツタク
タチマチ・カナラズ・チョウド」

。強意は副詞を利用して訳すが、強意とわかれば訳に出さなくてもいい

② 完了…(〜テシマツタ・〜タ・〜テシマウ)

《ハイレベル》

「つ」は動作的・意志的、また物事がそこで終わる。他動詞につくことが多い

「ぬ」は自然的・静止的、また物事がそこから始まる。自動詞につくことが多い

・ 敵と戦ひつ。

・ 花咲きぬ。

へこの形で覚えよう！↓ ↓下に推量の助動詞
「む」「べし」があったら、まずは完了でなく
強意でとろう

完了「未然形」

て	な	な	て
ば	ば	ば	ば
	な	む	

願望

完了(強意)

ぬ	つ	ぬ	つ
ら	ら	べ	べ
む	む	し	し

完了(強意)

て	て	て	て	て
む	き	け	け	き
	(し・しか)	(ける・けれ)		

完了

に	に	に
き	け	き
(し・しか)	(ける・けれ)	(たる・たれ)

今は昔、丹波の国（現在の京都府、一部兵庫県にまたぐ）に住んでいるものがいる（ちよつと意識して、いた）。田舎の人間であるけれども心に風流心のあるものであった。それ（〓丹波に住む男でいいよな！）が妻を二人持つて、家を並べて暮らしていた（サイコーだ、イエイ）。本の妻（〓最初からの妻）はその国（〓丹波の国）の人であった。（男は）本の妻をつまらなく思い、今の妻は京（〓都）から迎えたものであった（都会人だ！セレブだ。これじゃあ田舎妻は勝てないよ）。（男は）今の妻を（ちよつと意識して、今の妻によりいつそう）愛情がまさっている様子であったので、本の妻（〓最初からの妻は）「つらい（または、情けない）」と思つて過ごしていた。

そうしているうちに（〓このように暮らしているうちに）、秋、（都の）北の方向の山里であつたので（〓暮らしていたので）、後ろの山の方で、たいそうしみじみとした声で鹿が鳴いたので、男は今の妻（〓京からの妻〓新しい妻）の家にいたときであつて、新しい妻に、「この鹿の鳴き声はどのようにお聞きになりますか」と言つたところ、今の妻は、「煎物でも（ちよつと意識して、にしても）うまい。焼き物でも（これも意識、にしても）うまいやつですよ」と言つたので、男は、自分の予想と違つて、（新しい妻は）京の者であるので、このようなこと（〓まあ、簡単に言うてしまえば、鹿が鳴くこと。具体的には、間四）を「おもしろがるだろう」と思つたのに（そうではないので）、少々「気に入らない（もう少し意識しよう、気に入らない）」と思つて、すぐに最初の妻の家に行つて、男は、「この鳴いた鹿の声は、お聞きになりましたか」と言つたところ、本の妻はこのように（〓次の歌をさす）言つた（〓詠んだ）。

私もあのオス鹿がメス鹿を求めて鳴くようにそのように（〓同じように）泣いてあなたに恋い慕われたことよ。（しかし）今はそのあなたの声を他（〓隣の部屋）にばかり聞くことよ。

と。

男はこれ（〓本の妻の歌、必ず指示語は、明白にしていくこと）を聞いて「たいそういとしい」と思つて、新しい妻の言つたことと思ひ合わされて、今の妻の愛情がなくなつてしまつたので、都に送りかえしてしまつた。そして本の妻と暮らした。